

# ～～日中国際交流事業は子供達の

## 意識にどのような変化をもたらしたか～～

板柳町立板柳北小学校教諭 佐藤 康子

### 要 約

「国際交流体験により、子供達の国際的な意識は変化し、高まっていく」という声は聞くけれども、それは何をして変化したと考え、何をして高まったと言えるのだろうか。

2001年夏、中国という異国での書道や意見交換を目的とした小学生書道交流団に同行し、参加した小学生と同様に国際交流体験を持つことができた。20名の小学生の国際交流体験は、異なった文化に対しての快いカルチャーショックに留まるのだろうか。それとも、波及効果として同学年や学級の周囲にいる子供達の意識にも変化を起こし、その後の活動に影響を及ぼして行くのだろうか。

板柳町はりんごを中心とした町づくりを推進している。国際交流に関しては、りんごを掛け橋として、米国ワシントンのヤキマ市と姉妹都市を提携した。また、平成5年には中国北京市昌平区とも友好協定を締結し、小中学生や町民の海外派遣、海外の子供達の受け入れなど町民レベルでの国際交流活動を盛んに展開している。

2001年夏からの冬にかけて、小学生書道交流団の他にも中国音楽交流団の来日演奏会などの日中国際交流事業がいくつももたれた。中国の人達とのEメールや手紙の交流も始まっている。このような板柳町の国際交流事業とタイアップした学校でできる国際交流について6ヶ月にわたり調査し、板柳町の国際交流事業は子供達の意識の向上に有効であったか、子供達の国際交流に関する意識はどのように変化したかを調査分析した。その結果、国際交流事業は、児童の国際交流に関する意識に変化を与えた事が明らかになった。

【キーワード】 国際交流 中国 小学校 波及効果 青森県板柳町

## 1、はじめに

「中国では、青年は朝の8時の太陽だといわれている」中国で出会った一人の少年の話した言葉が今も頭の中に残っている。中国での子供達は、これから輝きを増して行く、まさに宝物なのである。また、日本でももちろん同様である。手塚治虫氏は子供達を未来人と呼んだ。子供達は宇宙空間に青く輝く水の惑星—美しい地球の未来を担っていく人間だから、未来人と呼んだのだ。手塚治虫氏は未来を担っていく未来人が好きだった。私達は今、その大切な未来人を育てているのである。

「豊かな人間性や社会性・国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」平成14年度からの指導要領の中ではこのような方針が打ち出されている。未来を担う子供達が夢や目標を抱き、広く世界の中で信頼される日本人として育てていくためには自分たちの国だけでなく、世界にはたくさんの国が存在することや、それぞれの国にはそれぞれの国民が自分たちの文化や伝統を大切にしていることを理解することが重要なのである。

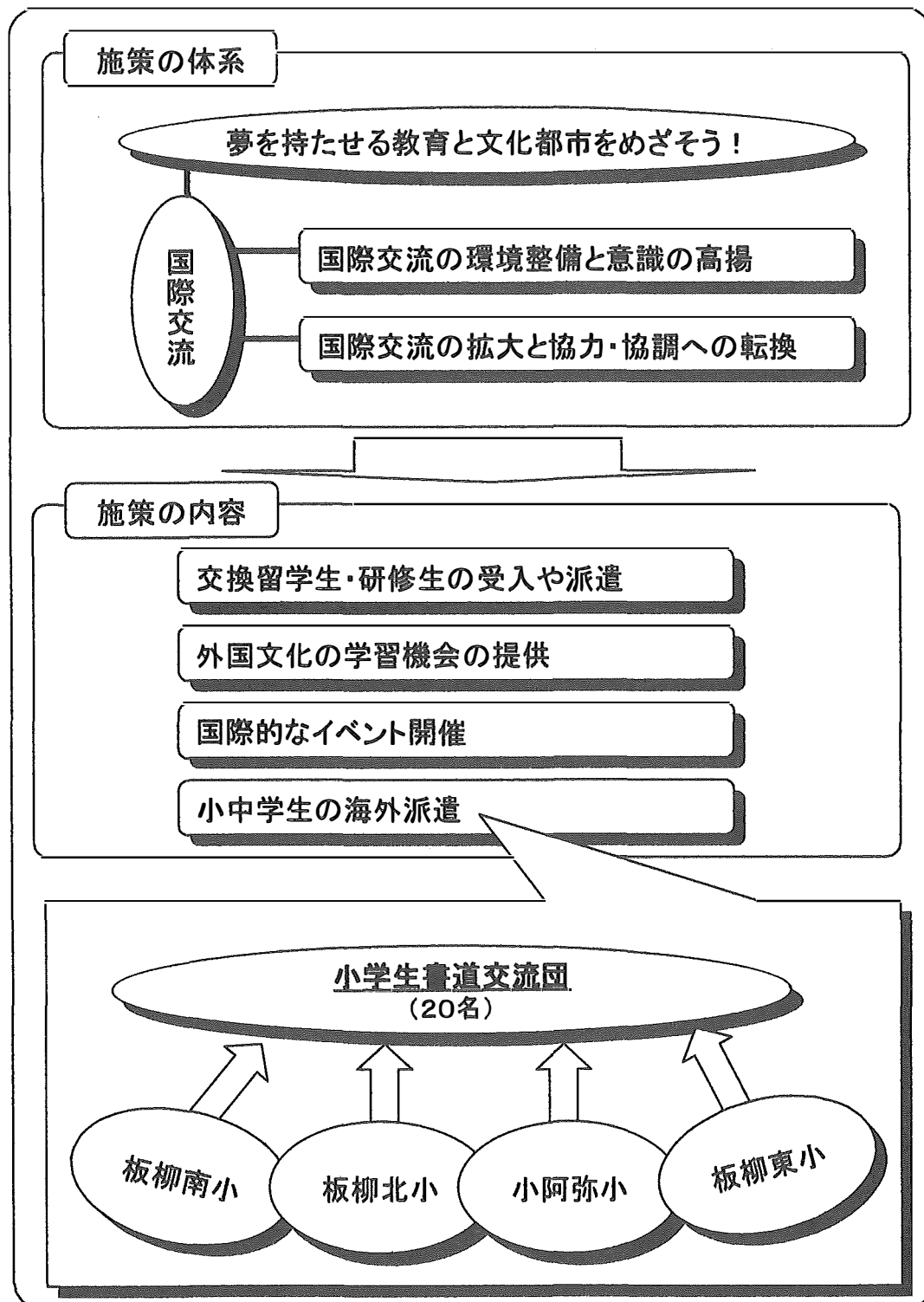
中国北京市昌平区での小学生書道交流団に参加した青森県板柳町の小学生20名や、同行した自分の交流体験は熱く心に残る貴重なものであった。しかし、それだけでいいのだろうか。いや、そればかりではいけないのである。参加した小学生20名と体験や思い出を共有する以上に、この交流団に参加しなかった数多くの未来を担う子供達に対してもこの異文化交流を広め、形は違っても国際交流の場面を設定していかなければならない責任が私にはある。

そこで、わが板柳町の国際交流事業に基づく小学生書道交流団での自分自身の交流体験や交流によって生まれたネットワークを活用し、学校に居ながらできる中国北京市昌平区の人達との国際交流とその成果を、子供達の意識の変化を通して考察していくことにした。

## 2、研究の目的

中国北京市昌平区での小学生書道交流団に参加した児童・教員が、在籍学級に及ぼす影響はあるのかを調査する。また、国際交流事業に関連した活動が子供達の意識にどのような変化を及ぼすかを調査・研究し、板柳町の国際交流事業の有効性を探る。

<板柳町の国際交流について>



#### 4、小学生書道交流団の事前研修および現地での交流日程と内容

##### (1) 事前研修等の日程及び内容

<図2>

日 時	研 修 等	内 容
6月28日	派遣決定通知	文書で通知 ※児童は抽選で決定
7月12日	パスポートの受領 事前講習会	渡航手続き、出発までの準備の説明 中国滞在中の留意点・交流日程の説明
7月19日	第2回事前講習会	書道交流についての説明 中国の文化、学校挨拶言葉の学習 板柳町についての学習等
7月27日	書道練習会	書道交流会の練習 子どもサミットの事前打合せ
8月6日	子どもサミット予行 練習会	仲間作りレクリエーション サミット予行練習、 税関の通り方の練習
8月14日	成田空港行き荷物発送	荷物の事前発送
8月15日	結団式	町や学校、国際交流の関係者出席
9月3日	解団式	町や学校、国際交流の関係者出席

##### (2) 小学生書道交流団参加者と日程表

中国北京市昌平区での小学生書道交流団の日程は次の図3の通りである。平成13年8月16日(木)から8月22日(水)までの7日間の予定であったが、変更については(3)で述べる。

##### □参加者と在籍校

<学 校 名>	<参加者の学年と人数>				<合 計>	
板柳南小学校	6学年	4名	5学年	2名	男3、女3	計6名
板柳北小学校	6学年	2名	5学年	4名	男3、女3	計6名
小阿弥小学校	6学年	2名	5学年	2名	女4	計4名
板柳東小学校			5学年	4名	男2、女2	計4名

期 日	日 程	宿 泊
8月16日(木)	板 柳 8:00 (バス) ~ ~ ~ 8:45 青森空港 青森空港 9:45 (J A S 160) 11:00 羽田空港 羽田空港 12:50 (リムジンバス) 14:05 成田空港 成田空港 17:05 (U A 853 ) 19:50 北京空港 北京空港 20:30 (バス) ~ ~ ~ 昌平区	昌平区 「財会之家」
8月17日(金)	10:00~11:30 書記、区長表敬訪問、懇談会 13:00~15:00 中日友好果園視察 (故石澤重信指導監の墓参り) 17:00~ 歓迎夕食会	昌平区 「財会之家」
8月18日(土)	9:30~12:00 昌平区内視察 13:30~15:30 日中子どもサミット	昌平区 853 「財会之家」
8月19日(日)	9:30~12:00 日中書道交流(白浮小学校) 14:00~16:00 学校訪問(十三陵鎮中心小学)	昌平区 「財会之家」
8月20日(月)	9:30~13:00 万里の長城見学 14:00~16:00 明の十三陵見学	北京市 「友誼賓館」
8月21日(火)	9:30~12:00 故宮見学 3:30~15:30 北京動物園見学	北京市 「友誼賓館」
8月22日(水)	北京市内 6:30(バス) ~ ~ 7:30 北京空港 北京空港 9:25(U A 8 5 2) 13:25 成田空港 成田空港 15:30(リムジンバス) 16:45 羽田空港 羽田空港 18:35(J A S 169) 19:45 青森空港 青森空港 20:30(バス) ~ ~ ~ 21:15 板 柳	

### (3) 台風による日程の変更

8月22日、帰国予定日であったが、運の悪い事に日本の関東地方に台風が接近し、飛行機が北京から成田に向けて飛び立てず、北京空港で足止めをされる事態に遭遇してしまった。

小学生書道交流団一行は北京市のホテルを後にし、北京空港に予定時刻の7時30分に到着した。一度機内に乗り込んだものの、全員降ろされ空港で待つことになった。

日本に帰れるのか、関西空港に向かうのではないかと様々な事態が心配されたが、予定時刻よりも6時間ほど遅れて成田へ向けて飛び立つことができた。

22日中に日本に帰ることはできたけれど、到着時刻が遅く青森への飛行機の便が無いため、成田に一泊するというアクシデントに見まわれる。しかし、23日全員無事に帰宅することができた。図4に変更した日程を記す。

＜図4＞

期 日	日 程	宿 泊
8月22日(水)	北京市内 6:30～7:30 北京空港 北京空港 15時頃(UA852) 19:25 成田空港 成田空港 20:30 ※成田市内のホテルに宿泊	成田市 日航ウイング
8月23日(木)	ホテル(バス)10:25～～～14:00 羽田空港 羽田空港 15:10(JAS167) 16:20 青森空港 青森空港 16:30 (バス)～ 17:15 板柳	

## 5、研究の実際

### (1) 研究内容

今回の国際交流に関する研究は以下＜Ⅰ、Ⅱ＞のように2つある。

#### ＜研究Ⅰ＞「小学生書道交流団に参加した児童・教員の影響を学級間の意識の比較により探る」

5学年2クラス、6学年2クラス計4クラス(A, B, C, Dは以下の図6に表す。)の学級でアンケート調査を1回実施し、小学生書道交流団に参加した児童や教員が在籍学級に及ぼす影響を、学級間の意識を比較することから探る。5学年と6学年では既習の学習内容がかなり異なるので、5年2クラス、6年2クラスの学年ごとに比較検討する。

#### ＜研究Ⅱ＞「同一学級の意識や知識の変化から国際交流事業の有効性を探る」

アンケートを同一学級A(5年1組)を対象に2度実施し、国際交流の意識や知識の変化があったかを調査し、板柳町の国際交流事業の有効性を探る。

(2) アンケート項目の作成

<図5>

＜国際交流アンケート＞	
1、みなさんは中国という国を知っていますか？	<u>4</u> 3 2 1
2、中国という国に興味がありますか？	<u>4</u> 3 2 1
3、中国に興味を持ったのはなぜですか？	
理由	
<div style="border: 1px solid black; height: 40px;"></div>	
4、中国の都市で知っているところがいくつ くらいありますか？(都市名など)	<u>4以上</u> 3 2 1
<div style="border: 1px solid black; height: 30px;"></div>	
5、中国の人達と仲良くなりたいですか？	<u>4</u> 3 2 1
6、どんな交流をしたいですか？	
内容	
<div style="border: 1px solid black; height: 40px;"></div>	
7、中国に行ってみたいですか？	<u>4</u> 3 2 1
8、中国の事を学びたいですか？	<u>4</u> 3 2 1
9、どんな事を学びたいですか？	
内容	
<div style="border: 1px solid black; height: 40px;"></div>	
10、中国と板柳町の交流について知っていますか？	<u>4</u> 3 2 1
内容	
<div style="border: 1px solid black; height: 40px;"></div>	

(3) <研究I>について

「小学生書道交流団に参加した児童・教員の影響を学級間の意識の比較により探る」

◇研究の目的：

小学生書道交流団に参加した児童や教員が学級にいることによって、学級の子供達の意識に影響を及ぼすか学級間の意識の調査をする。

◇研究のアンケート対象：

板柳町立板柳北小学校平成 13 年度 5 年生 44 名及び 6 年生 51 名

◇構成：平成 13 年度 9 月アンケート実施者

<図 6 >

A	5 年 1 組 22 名	小学生書道交流団に児童 1 名と担任教員が参加
B	5 年 2 組 22 名	小学生書道交流団に児童 3 名参加
C	6 年 1 組 25 名	参加者なし
D	6 年 2 組 26 名	小学生書道交流団に児童 2 名参加

◇調査方法：

個人ごとによる記入方式アンケートの様式は図 5 に表す。この研究で調査のために用いるアンケートは全て同じものである。結果の処理には統計的検定を行った。

◇アンケート実施日：

A と B の学級は 9 月 10 日に実施した。

C と D の学級は 9 月 16 日に実施した。

◇資料の取り扱い：

各項目で 6 学年 1・2 組及び 5 学年 1・2 組でのアンケート調査の結果を比較検討する。学年ごとに比較する理由は、6 年生の社会科で歴史を学習し、日本と中国の関係を学ぶことや、5 学年で学習する中国や他の国々との貿易問題等 5 年生はこの時期に未習であること等による学習経験の違いのため、学年ごとの比較検討とした。

アンケートを実施した結果を、6 学年については平均値と標準偏を出し、比率の差の検定  $\chi^2$  検定 2 k 分割、平均値の差の検定 t 検定、分散の差の検定 F 検定を行い、有意差があるのかどうかを図 7 で示した。

また、平均値のグラフ図 8 からその理由を考察して行った。5 学年の結果については、平均値や標準偏差を図 9 に表し、図 10 の平均値のグラフから、理由について考察した。



① 結果とその考察

<図7>

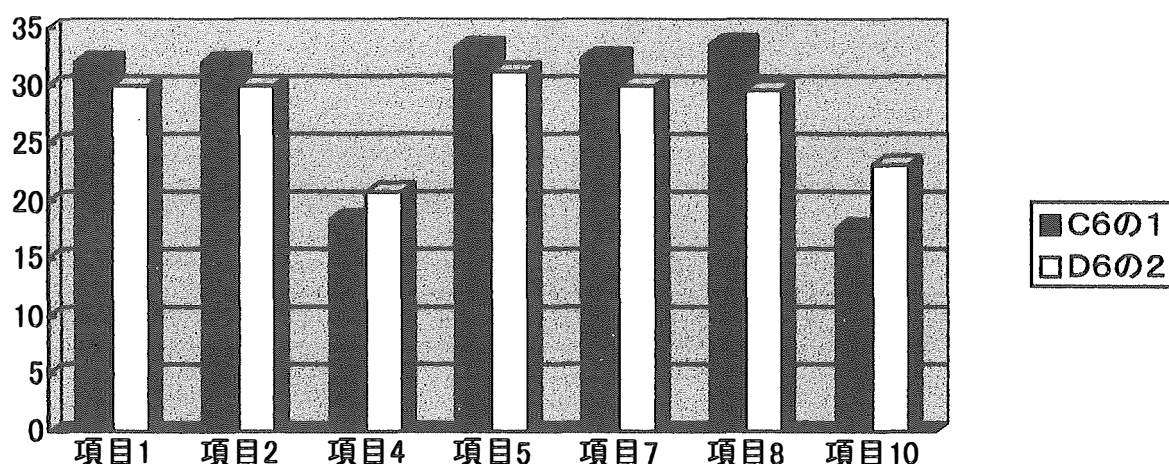
6学年の学級間比較

6組資料一覧		評点(4~1)の処理用					全訂正済				
学年一組	項目	選択肢番号	選択肢番号				人数	合計点	平均値	SD	単純計算
		評点	4	3	2	1				標準偏差	
6-1	1	人	12	8	3	2	25	800	32	9.3808	4.645787
		(%)	48	32	12	8	100				
6-2	1	人	7	13	5	1	26	780	30	7.8446	5
		(%)	26.92	50.00	19.23	3.85	100				
結果と有意差危険率5%		2K分割	χ二乗=16.1602327						t=166.7888	F0?0.025	
			有意差:有						有意差:有	F0<p0.025	
										有意差無	
6-1	2	人	11	10	2	2	25	800	32	8.9443	4.924429
		(%)	44	40	8	8	100				5
6-2	2	人	7	13	5	1	26	780	30	7.8446	5
		(%)	26.92	50.00	19.23	3.85	100				
結果と有意差危険率5%		2K分割	χ二乗=13.1917						t=0.830806	F0?0.025	
			有意差:有						有意差:無	F0?p0.025	
										有意差:無	
6-1	4	人	1	5	8	11	25	460	18.4	8.80000	4.272002
		(%)	4	20	32	44	100				
6-2	4	人	3	5	9	9	26	540	20.7692308	9.9704	3
		(%)	3.85	19.23	30.77	42.31	96.154			F0?0.025	
結果と有意差危険率5%		2K分割	χ二乗=4.8953159						t=0.88277	F0<p0.025	
			有意差:無						有意差:無	F0<p0.025	
										有意差:無	
6-1	5	人	14	7	2	2	25	830	33.2	9.2607	5.678908
		(%)	56	28	8	8	100				
6-2	5	人	15	3	4	4	26	810	31.1538462	11.5449	5.686241
		(%)	57.69	26.92	7.69	7.69	100			F0?p0.025	
結果と有意差危険率5%		2K分割	χ二乗=11.3427942						t=3.85769	F0?p0.025	
			有意差:無						有意差:有	有意差:有	
6-1	7	人	13	7	3	2	25	810	32.4	9.4995	4.99166
		(%)	52	28	12	8	100				
6-2	7	人	11	7	5	3	26	780	30	10.3775	3.41565
		(%)	42.31	26.92	19.23	11.54	100				
結果と有意差危険率5%		2K分割	χ二乗=7.81476						t=0.80927	F0?p0.025	
			有意差:有						有意差:無	F0?p0.025	
										有意差:有	
6-1	8	人	12	11	1	1	25	840	33.8	7.4189	6.075909
		(%)	48	44	4	4	100				
6-2	8	人	9	10	4	3	26	770	29.6153846	9.7983	3.511885
		(%)	34.62	38.46	15.38	11.54	100				
結果と有意差危険率5%		2K分割	χ二乗=7.81476						t=1.00876	F0?0.025	
			有意差:有						有意差:無	F0?p0.025	
										有意差:有	
6-1	10	人	1	3	10	11	25	440	17.6	8.1388	4.99166
		(%)	4	12	40	44	100				
6-2	10	人	5	5	9	7	26	800	23.0769231	10.6588	1.914854
		(%)	19.23	19.23	34.62	26.92	100				
結果と有意差危険率5%		2K分割	χ二乗=16.1602327						t=2.02649	F0?p0.025	
			有意差:有						有意差:無	F0?p0.025	
										有意差:有	

注:標準偏差欄のpは確率0.025%を現す。

sd-ok

図7を基に6学年の1組と2組を比較した。全項目の平均値をグラフに表すと、図8のようになる。 < 図8 >



項目4と項目10以外は6年1組の選択肢番号が高いほうに偏っている事がわかる。図7から1組と2組の比率の差を比較した $\chi^2$ 二乗検定2k分割で見ると、項目の1、2、7、8、10で有意差が有りとなっている。この1組と2組は違った傾向を持つ学級であることがわかる。1組は2組に比べて中国に関して、興味関心、知識、学びたいという意欲が高い傾向に有る学級であると言える。「中国に行きたいと強く思っている子供」は、参加者のいない1組のほうが多かった事が項目7からもわかる。

1組のほうが高い結果が得られるグループなのだとと言える。1組が高い原因は、1つは今までの中国に関する歴史や地理などの学習状況等にも関係があると考えられる。2つは、1組2組の構成している子供達のもっている資質によるものかもしれない。この点について、平成12年度実施のTK式観点別到達度学力検査を調べてみた。標準得点の平均は1組が社会、算数、理科の3教科で2組を上回っていた。国語は2組がわずかに1組を上回っていたという実態からも裏付けられる。

ただ、注目すべき点がある。意識や知識は1組が高い傾向にあるにもかかわらず、2組が上回っている項目がある。項目4の「中国で知っている都市」と項目10の「板柳町の交流に関して知っているか」である。この2項目に関してだけは、標準偏差でも、分布でも、2組が上回っている。有意差があってしかるべき学級であるのに、有意差が無しとなっているのは、2組がこの点に関して逆に高くなっているとは見て良いのではないか。

1組には小学生書道交流団に参加者がいなかった。2組には学級の中に実際に参加

した子供が2名いたのである。中国での実体験を話題提供すること、写真・手紙・お土産などを見せたりすることによっても異国の文化や情報が周囲に波及して行く事がわかった。これは、自由記述の項目10でもわかる。

6の1 ・学校の習字掲示 ・よく知らない ・学校のメール掲示

6の2 ・友達が行った ・学校のメール習字掲示・先生から聞いた

参加者のいる6の2では友達が行った事や、それに関わって担任の先生が話した事が交流を知る上での大きな要因となっている。参加者のいなかった6の1では参加者がいないため担任からの話題も出ないのである。板柳町でどんな交流をしているかがわからないという答が多くあったことからわかる。

以上の事から、小学生書道交流団の参加者が学級にいと、参加者のいない学級に比べて国際交流の情報がいろいろな角度から入りやすく伝わりやすい。つまり、学級など一つのグループの中に参加者を置くことが、国際交流の波及効果を高めるための有効な方法であるという事が言えるのである。

次は、5学年2学級の比較検討である。A(5年1組)の学級は児童1名と担任が小学生書道交流団に参加している。Bの学級(5年2組)は児童3名が参加している。人数的には、Bの学級の方が1名上回っているのであるが、この2クラスの比較は、担任が学級の子供達に及ぼす影響力を見るものである。

＜5学年の学級間における意識の比較＞								＜図9＞
項目	1	2	4	5	7	8	10	
内容	知識	興味	都市	仲良く	行く	学ぶ	交流	平均値
A人数	22	22	22	22	22	22	22	
平均値	3.27	2.82	2.36	3.64	3.27	3.41	3.18	3.14
S D	6.45	2.08	4.73	7.77	4.43	5.45	3.87	
B人数	22	22	22	22	22	22	22	
平均値	3.32	2.82	2.23	3.36	3.09	3.36	2.18	2.91
S D	4.65	1.91	3.11	5.00	4.20	6.40	2.65	

図9の平均値を項目ごとにグラフに表すと、図10のようになる。1、4、5、7、8

10の項目でAの学級がBの学級の平均値を上回っている。2項目に関しては同じ値を示している。(平成12年度実施のTK式観点別到達度学力検査は実施しているが、学級編成を実施しているために、学級単位としての資料はない。)

<図10>

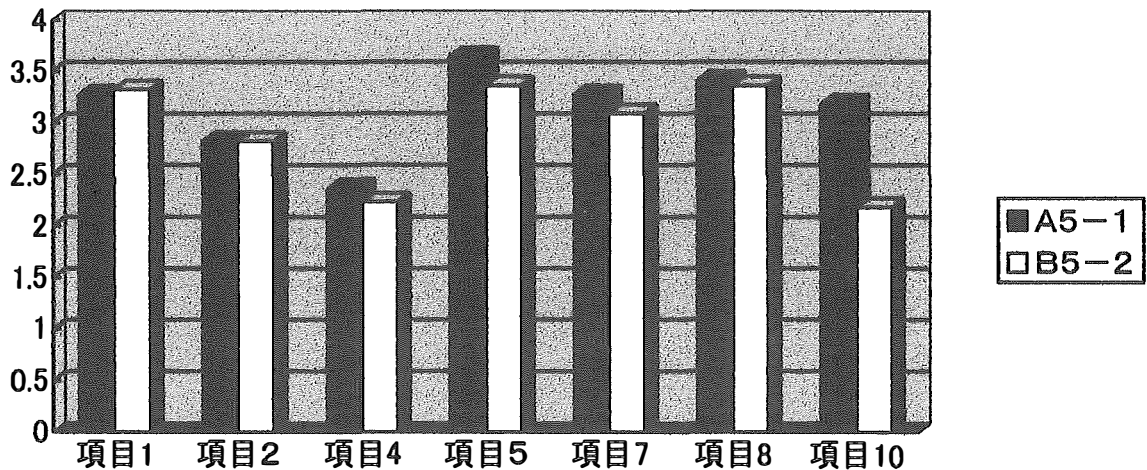


図10から、同じ5学年で、児童が3名参加した2組Bに比べて、児童1名と担任が参加した1組Aの方の平均値が全体的に高い事がわかった。これは、交流人数ではなく、担任教員というポジションが、子供達に影響力が強い存在を持ち、思いや知識を伝えやすい位置にあることを示す。

質問項目10の板柳町の国際交流に関する自由記述の中にもこの結果は出てくる。参加者のいないCのクラスでは板柳町でどんな交流をしているかがわからないという答も多くあったが、学校に貼られた習字やEメールなどから板柳町の国際交流の情報を得ていた。これは、学校の掲示物や環境の子供達に及ぼす影響の大きさを物語っている。教員が中心となって行う教育活動であり、交流経験や交流のネットワークがものをいう仕事なのである。

このようなことから、交際交流の波及効果を高めて行くためには、子供達の派遣以上に教員の国際交流や海外派遣が有効であることがわかった。

次に、数値に現れない子供達の生の声を問う自由記述の項目に関しては次のように各学級の上位3種類の回答を示した。

質問項目3 中国という国を知っていますか <各クラス上位3種類の答>

5の1 ・万里の長城 ・習字 ・友達や先生が行った

- |     |        |        |             |
|-----|--------|--------|-------------|
| 5の2 | ・料理に関心 | ・パンダ   | ・服装         |
| 6の1 | ・料理    | ・言葉    | ・日本とは変わっている |
| 6の2 | ・食べ物   | ・分からない | ・服装         |

**質問質問 6** どんな交流をしたいと思いますか？

- |     |       |             |             |
|-----|-------|-------------|-------------|
| 5の1 | ・遊びたい | ・習字を一緒に書きたい | ・お互いの良い所を話す |
| 5の2 | ・遊びたい | ・言葉を教え合いた   | ・いろいろやりたい   |
| 6の1 | ・話したい | ・スポーツ       | ・料理したい      |
| 6の2 | ・遊びたい | ・一緒に話したい    | ・料理をしたい     |

**質問項目 9** どんな事を学びたいですか？

- |     |     |       |       |
|-----|-----|-------|-------|
| 5の1 | ・習字 | ・言葉   | ・料理   |
| 5の2 | ・料理 | ・スポーツ | ・パンダ  |
| 6の1 | ・言葉 | ・料理   | ・歴史   |
| 6の2 | ・言葉 | ・料理   | ・スポーツ |

**質問項目 10** 中国と板柳町の交流について知っていますか？

- |     |          |             |           |
|-----|----------|-------------|-----------|
| 5の1 | ・先生が行った  | ・友達が行った     | ・先生から聞いた  |
| 5の2 | ・友達が行った  | ・先生のお土産     | ・先生が行った   |
| 6の1 | ・学校の習字掲示 | ・よく知らない     | ・学校のメール掲示 |
| 6の2 | ・友達が行った  | ・学校のメール習字掲示 | ・先生から聞いた  |

自由記述についての結果では、質問項目6からは、子供達の望んでいる交流が見えてくる。A～D全ての学級で子供達は「一緒に遊びたい」という願いを持っている。「一緒に」とか、「教え合いたい」という言葉から、日中の子供達がもっと身近に接近した交流を望んでいることが推測される。

「一緒に話したい、言葉を教え合いたい」という願望もある。この事から、小学生書道交流団が行った「日中子供サミット」のようなお互いの意見交流の場は大切であり、設定すべきであることがわかる。6学年では歴史を習いたいという記述が見られる。6学年の社会科学習経験から来るものである。

◇国際交流の波及効果を高めるためには、学級の中に児童の参加者がいる事

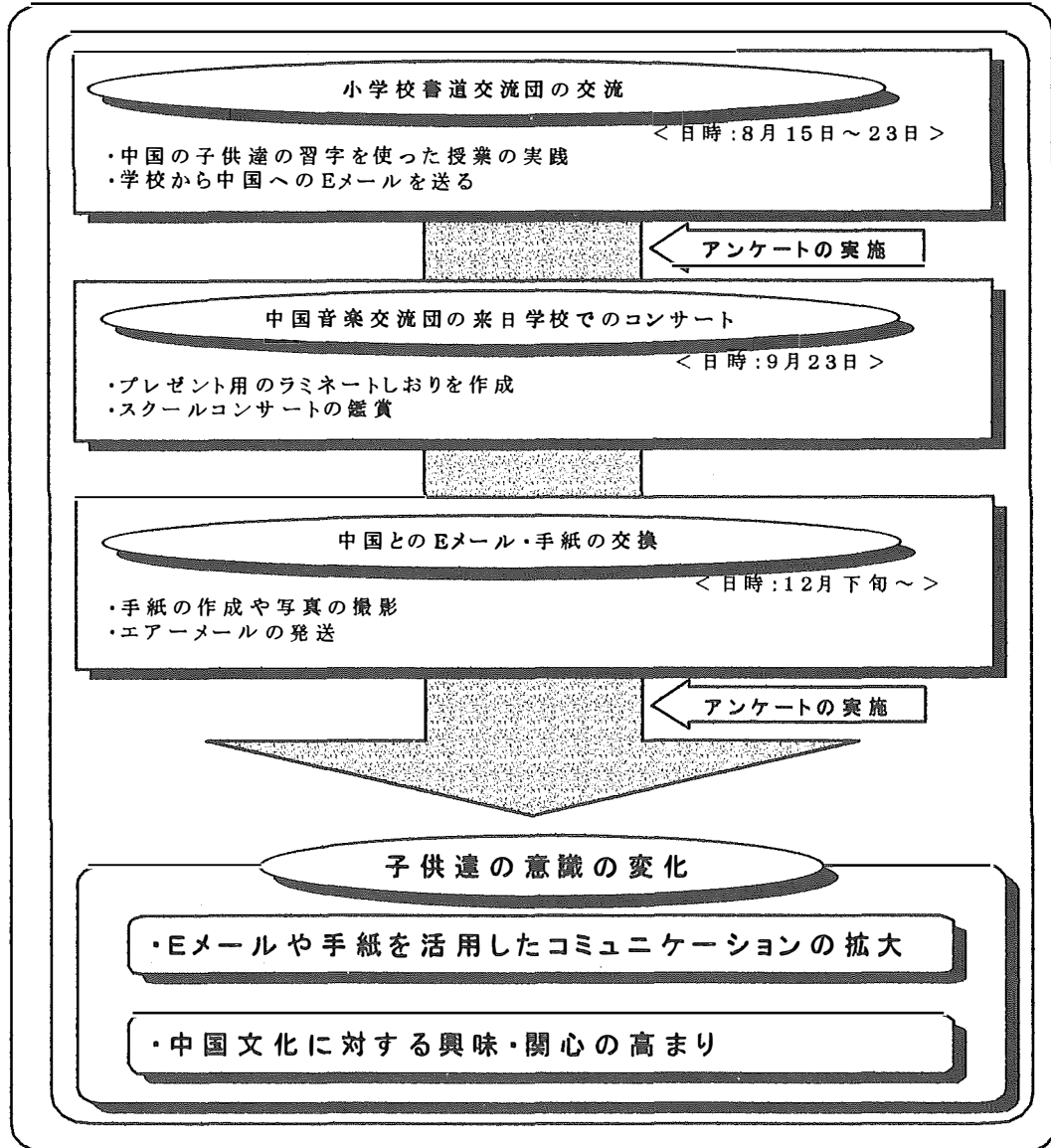
◇子ども達の意識を効果的に高めるためには教師の交流や派遣がより有効である  
以上の研究から上記の2点が言える事がわかった。

(4) <研究Ⅱについて>

「同一学級の意識や知識の変化から国際交流事業の有効性を探る」

<図 11 >

<町の交流事業と学校の連携>



◇研究の目的:

関連した板柳町の国際交流行事を通して、子ども達の意識や知識がどのように変化していったかを調査し、国際交流事業の有効性を探る。

◇研究のアンケート対象:

板柳町立板柳北小学校平成13年度5年1組22名

#### ◇調査方法：

上記の学級を対象とし①の研究と同じアンケートを2度実施する。個人ごとによる記入方式アンケートの様式は図5に示す。9月10日、1月17日の2度実施した。

#### ◇資料の取り扱い：

結果の処理には学級の平均値・選択者数（割合）を出し、統計的な検定を行った。

$\chi^2$  検定 2 k 分割、t 検定、F 検定を用い比較検討し結果を図12に表した。

質問項目3、6、9の自由記述の回答を記すが、質問項目10は平均値・ $\chi^2$  検定 2 k 分割ならびt 検定、F 検定と自由記述の回答両方を記す。

### ①町の交流事業と学校の連携

板柳町の交流事業と学校での活動は図11に示すように連携をとりながら、学校にできる国際交流を実践していった。

### ②アンケートの提示と考察

$\chi^2$  検定 2 K 分割を行い、1回目と2回目の分布の差をみたところ、図12によると質問項目の1、2、5、6、10で有意差が見られた。選択肢の割合に1回目と2回目では違いが見られる。上記の質問項目で有意差が見られ、分布が高いポイントのほうに移行したことがわかる。ただ、質問項目の8「学びたいですか」に関して有意差は見られなかった。これは、子供達の「学習＝勉強」というイメージがあるため、1回目と2回目に有意差が見られなかったものとする。標準偏差の散らばりで見ると、項目1、4、9、10で有意差が見られる。

これらの結果によると、板柳町の国際交流事業によっておおむね子供達の意識が向上したといえる。

その意識の向上の要因となったものとして国際交流行事の持ち方と情報教育機器の活用の2点が考えられる。まず1点目としては板柳町の国際交流事業が単に1回で終わることなく計画的継続的行われていて、半年の間に数回もたれた事にある。その都度、子供達に関連した活動を設定する事によって、2度目の平均値の調査が向上して行ったと考えられる。

2点目に情報機器の活用や意思の伝達の手段については、ここ数年でインターネットやEメールが急速に普及した。それに伴って子供達自らがコンピューターを中心としたメディア機器を学習の道具として活用し、情報の加工や工夫ができるようになりより幅広い学習活動が可能となってきたことが大きく影響していると考えられる。現在、子供達は島根県の小学校と交流を持ち、Eメールの交流を行っている。さらに、交流の相手が日本の国から飛び出し中国にエアーメールやEメールを送ることは未知の体験であり、子供達の意欲や関心は低下することなく向上して行ったものとする。

< 5年1組における調査結果集計表 >

< 図 12 >

5年資料 評点(4~1)  
の処理用

学年一回数	選択肢		選択肢 (下段評点)				訂正済		
	選択肢番号	4	3	2	1	人数	合計点	平均値	標準偏差
5-1	項目(人)	40	30	20	10	22	720	32.72727	5.3783
	(%)	31.82	63.64	4.55	0	100			
5-2	項目(人)	19	3	0	0	22	850	38.63636	3.4317
	(%)	86.36	13.64	0.00	0.00	100			F□□p0.025
検定結果	χ <sup>2</sup> 二乗検定	24.32	52.72	√2.3426			検定	t=166.789	F'□□p0.025
有意差	判定	有	有	補正:無			判定	有意差:有	両側:有
5-1	項目(人)	8	5	6	3	22	620	28.18182	10.718
	(%)	36.36	22.73	27.3	13.64	100			
5-2	項目(人)	10	9	2	1	22	720	32.72727	8.08
	(%)	45.45	40.91	9.09	4.55	100			F□□p0.025
検定結果	χ <sup>2</sup> 二乗検定	1.7091	7.3170	11.14	5.00			t=0.830806	F'□□p0.025
有意差	判定	無	有	有	有			有意差:無	両側:無
5-1	項目(人)	2	6	12	2	22	520	23.63636	7.7139
	(%)	9.09	27.27	54.55	9.091	100			
5-2	項目(人)	11	5	5	1	22	700	31.81818	9.3597
	(%)	50.00	22.73	22.73	4.55	100			F□□p0.025
検定結果	χ <sup>2</sup> 二乗検定	40.20	0.00	0.5503	√1.6223			t=0.88277	F'□□p0.025
有意差	判定	有	無	無	無			有意差:無	両側:有
5-1	項目(人)	17	2	3	0	22	800	36.36364	7.1002
	(%)	77.27	9.09	13.63636	0.00	100			
5-2	項目(人)	13	8	0	1	22	770	35	7.23
	(%)	59.09	36.36	0.00	4.55				F□□p0.025
検定結果	χ <sup>2</sup> 二乗検定	7.6117	21.7373	14.592	√2.93426			t=3.85769	F'□□p0.025
有意差	判定	有	有	有	補正:無			有意差:有	両側:無
5-1	項目(人)	11	7	3	1	22	720	32.72727	8.6244
	(%)	50.00	31.82	13.64	4.545	100			
5-2	項目(人)	14	3	3	2	22	720	32.72727	10.1741
	(%)	63.64	13.64	13.64	9.09	100			F□□p0.025
検定結果	χ <sup>2</sup> 二乗検定	3.7992	9.4091	√	1.6258			t=0.80927	F'□□p0.025
有意差	判定	無	有	無	無			有意差:無	右側:有
5-1	項目(人)	13	6	2	1	22	750	34.09091	8.3443
	(%)	59.09	27.27	9.09	4.55	100			
5-2	項目(人)	12	6	3	1	22	730	33.18182	10.1741
	(%)	54.55	27.27	13.64	4.55	100			F□□p0.025
検定結果	χ <sup>2</sup> 二乗検定	0.42	0.00	1.04	0.00			t=1.00876	F'□□p0.025
有意差	判定	無	無	無	無			有意差:無	右側:有
5-1	項目(人)	10	7	4	1	22	700	31.81818	8.8607
	(%)	45.45	31.82	18.18	4.55	100			
5-2	項目(人)	12	3	7	0	22	710	32.27273	9.9146
	(%)	54.55	13.64	31.82	0.00	100			F□□p0.025
検定結果	χ <sup>2</sup> 二乗検定	1.6690	9.4091	9.967	√2.834			t=2.02649	F'□□p0.025
有意差	判定	無	有	有	補正:無			有意差:無	右側:有

注: χ<sup>2</sup>二乗検定の「y」付判定イエーツ補正の値



また、自由記述の質問項目の「どんな交流をしたいですか？」という問いは研究Ⅰ、Ⅱの研究の結果に共通して多くの子供達がこのように答えている。「遊びたい。言葉を教え合いたい。一緒に料理を作りたい。」ならばどうであろうか。交流の場は大人がセットしても子供達の発想を生かし、企画に加え、大人は支援にあたるという1場面があってもおもしろいのではないだろうか。例えば、板柳町のシンボル「ふるさとセンター」の活用である。日中の子供達と一緒にし、せんべいやクッキーの製作を共にしたり、中国の料理を教えてもらうゲームやスポーツで汗を流すなどの密着型の交流も一部取り入れることを提言したい。言葉が通じなくても、伝えようという心は通じるはずである。

平成14年度の町の交流事業計画はもう既にスタートしている。今年度は、板柳町が迎え入れる立場にある。ぜひ、日本と中国の子供達の交流スタイルや、交流メンバーの選出方法などで今回の研究の結果を一考して頂ければ幸いである。

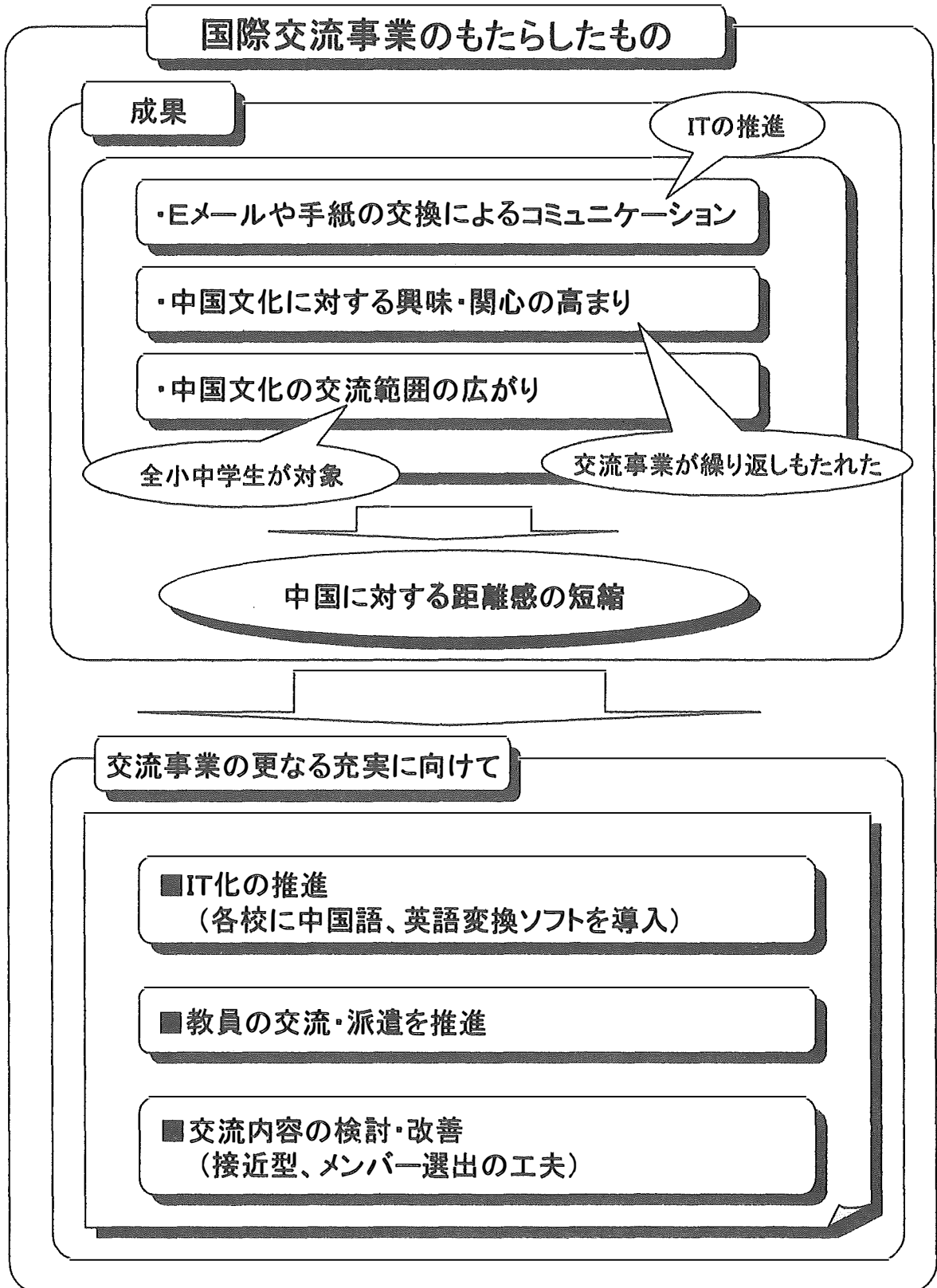
## 6、まとめ

板柳町の交際交流事業がもたらしたものは、子供達の意識の中にある中国との距離感を縮めたことにある。意識の中の距離感を縮めたとは、第1に中国に対する知識や興味や関心が高まったことにある。小学生書道交流団として自分の身近なクラスメートや教師が中国に行き交流体験をしてくる。また、中国の音楽交流団が学校に来て目の前で演奏し、一方的な交流ではなく双方向のやりとりを持つことができた。子供達は、もはや中国や北京や昌平区はテレビだけ、教科書や地図帳の中だけの国や都市ではないことを実感したはずである。

第2に、国境を超えた交流のスタートである。Eメールのやりとりは、最近めざましい進化をしている学校教育へのIT普及によってもたらされたものである。時間や距離をこえての交流は今後更に盛んになる事であろう。手紙やデジカメで撮影した写真のやりとりも、子供達にとっては大きな刺激となっている。

第3に国際交流の範囲の広がりである。1992年、りんごという1つの果物の栽培技術指導からスタートした板柳町と昌平区の交流は今、民間交流・文化交流へと歩を進め、新たな世紀において老若男女を問わずグローバルな人と人との絆を深めていくであろう。今年度は、板柳町の福祉センターでの中国文化交流団コンサートや町民祭への参加。昨年度の町民による昌平区訪問や万里の長城での凧上げなど多岐にわたる。

< ま と め >



小中学生の子供達の交流をみても、中国文化交流団によるスクールコンサートの全小中学校での会催など、交流の対象を町内の5, 6年生を交流の対象としたものから小中学校全学年、全児童生徒にと確実に広げているのである。

板柳町の交流事業の更なる充実を考えた時、このような事を検討してはどうだろうか。まずは、学校教育におけるIT化の更なる推進である。現在、学校には中国語変換ソフトが入っていないために、板柳町役場電算室にEメール転送し、変換をしてもらうか、中国サイドで、日本語に変換してもらうかの2通りである。将来的に子供達自身が学校で変換し、送れる状況を作っていくためには、中国語や英語の変換ソフトが学校でも必要なのである。

つぎに、国際交流を推進している板柳町ではあるが、現状として町の子供達全てが中国に行けるわけではない。そこで、子供達だけではなく教員の交流も将来的に視野に入れた事業を行ってほしい。教員の交流体験が、より多くの子供達に国際交流情報を伝え、実際に行かない子供達にも何らかの国際交流の体験をもたらす効果が期待できるのである。また、教員は日常的に学校の環境整備として国際交流コーナーを設け中国の子供の書いた書を飾ったり、参観日を活用して中国へのEメールを掲示したりすることができ、学校の全活動を通して全校児童や保護者に対しても国際交流事業を知らせ、広めることができるのである。

板柳町の日中国際交流は時代を担う子供達の交流を推進していて、14年度は中国の子供達が板柳に来る予定で既に計画が進行している。中国の子供達とどのような交流が持てるか、わがクラスの子供達は今からとても楽しみにしている。板柳町の交流事業が盛んに行われるという良い条件を生かしながら関係機関と連携と融合を図り、いかにタイムリーに、いかに効果的に教育活動をつなげて行くかは「子供達と活動を出会わせるためのコーディネーター」としての教師の手腕やネットワークが問われるところである。

## おわりに

2001年8月18日、中国の北京市昌平区で行われた日中子どもサミットの中で、中谷豊板柳町教育長はこのようなスピーチを述べられた。

私達の住むふるさとは白神山地があります。白神山地は世界遺産の一つです。白神山地は、ブナという木の原生林で覆われています。ずっと前から絶えることなく続いてきた森林を、私達が地球環境を絶やすことのないようにして行きたいものです。

自分のふるさとをしっかりと理解し、大切に思うことがベースとなって、はじめて世界にはたくさんの国が存在することや、それぞれの国にはそれぞれの国民が自分たちの文化や伝統を大切にしていることを理解することができるのである。

国際交流体験をすることや、外国の人や他県の人に宛て手紙を書いたりEメールを送ったり語ったりするためには自分たちのふるさとを真剣に考え、故郷を見つめなおさなければならない。外国や他県の人と交流する事はすなわち、自分達の故郷を見なおす絶好のチャンスでもあり、将来の夢にもつながってくる重要な体験にもなるのである。

「夢を持たせる教育と文化都市をめざそう」ということで、わが板柳町は新しい教育への取り組みとして、情報化と国際化に対応した教育の推進を行っている。IT革命のもたらす情報化の一層の発展、国民住民レベルでの国際化の進展は避けて通れない時代の流れであり、それに対応する人づくりを小、中の義務教育の段階から推進するように努めている。実際に、小中学生や町民の海外派遣、海外からの子供達の受け入れ、小中学生の作品交換やEメールの送信など多種多様な国際交流活動を行っている。また、町民に対してもさまざまな場面で国際交流への意識の高揚を図っている。パソコン1つを見ても、現在、町民の誰でもが触れるように、自由に使えるものが役場と公民館とに設置され、多くの町民が触れ楽しんでいる。自分の家に無くても町民の誰もがパソコンやインターネットの体験ができるように配慮されたものである。このように、板柳町では国際化や情報化での支援体制を推進しているのである。

今回の小学生書道国際交流団の企画からはじまり、交流団に同行し、全てにわたって一人で背負ってくれた板柳町役場総務課鈴木清孝課長補佐は、子供達にこのような熱いメッセージを送ってくれた。

「板柳町の子供達」にとっては今回の中国での小学生や多くの方々との交流、そして、大陸文化・歴史・遺産の見学は、貴重な体験となったことと確信すると共に、人間としての心のふれあいができたと思う。各自のこれからの人生に必ずやプラスになるはずである。

参加した子供達の40の瞳は、帰国後、確実に世界に向けて輝きが増していると感じるのは、自分だけではないはずである。

今回の研修を生かして、国際人として成長してくれることを願うものである。

今回の交流は確かに国際交流として、中国の文化や人と触れ合う異文化交流を目的とした貴重な体験であった。しかし、今振り返ってみるとそれ以上に確かな収穫が子供達そして、板柳町に勤務する私にはあったのである。

まず1つは、自分たちがすむふるさと板柳町がどのようなスタンスにたって国際交流に取り組んで行っているのかをはっきり自分の目で見る事ができたことである。自分たちの地域に、ふるさとのために真剣に仕事をする。ふるさとに住む人間を本気で育てていこうとする地域の先輩の姿勢を目の当たりにした事である。交流団に参加した一人の子供は「将来は、役場職員になって、いろいろな仕事をしたいです」と帰国後の作文に書いた。単なる形だけではない熱い思いを感じ取ったにちがいない。

2つ目としては人との出会いである。出会ったのは、中国の人達ばかりでない。ふれあったのは、中国の人達とばかりではない。たくさんの人と出会い、ネットワークが広がったことは何よりの財産である。この研究の始まりである中国ではたくさんの方にお世話になりました。李永林教育局副局長、手紙を下さった白浮小学校の陳自東校長先生、メール友達の趙さん。高校生のペンフレンドのボウ。熱い熱い思い出をありがとう。また、Eメールの送信や中国語の変換に協力してくれた板柳町役場電算室そして、このような中国での国際交流の機会を与えてくれた板柳町長さんに心よりお礼を申し上げます。そして、何より、研究をまとめる上で御指導くださった弘前大学の吹貝教授に感謝いたします。

初めてのエアメールにチャレンジした子ども達は、思いを何とか伝えようと教室で頭をひねった。どんな写真を撮って、故郷のよさは、日本の良さは、日本の学校はこうなんだよと一生懸命伝えるために。中国語も書いてみた。辞書を見て。「漢字を並べると伝わるよね」そう言って学校のポプラの写真を「学校宝」と説明した。「こ

れでいいのかな、伝わるかな板柳のりんごが」と悩みながら文を書いた。「日本の故郷を伝えよう」と「給食はこうですよ」ある子はデジカメで給食を写した。「板柳は雪が降る事を伝えたい」と岩木山をバックに歩くスキーの授業風景の写真を撮った。子供達の笑顔は輝いていた。何とも頼もしい私の大切な未来人たち。

<参考・引用文献>

- 石子 順 1995 命を見つめて一手塚治虫小学校「国語6下」学校図書P17
- 文 部 省 1999 小学校学習指導要領解説道徳編 文部省 P2、3
- 文 部 省 1999 小学校文化や伝統を大切に育てる心育てる文部省P5、6、11
- 吹貝 賢一 1998 研究の進め方論文の書き方統計初歩 弘前大学教育学部教育実践研究指導センター p19～p55
- 中谷 豊 2001 日中子どもサミット（板柳町編集）より
- 鈴木 清孝 2001 板柳町役場 復命書 「総括事項」より
- 鈴木 清孝 2001 「人とりんごのグローバルコミュニティ」生涯フォーラム秋号 p6、7、8、9 財団法人 社会教育教会
- 青森県板柳町 2001 新板柳町長期振興プラン「りんごの里」プラン21（板柳町編纂）P82、83、84、91

特色ある教育活動の展開のための実践事例集 2000

—「総合的な学習の時間」の学習活動の展開（小学校編）— 文部省

滋賀県大津市立平野小学校

千葉県東金市立鶉嶺小学校

茨城県水戸市立梅が丘小学校